

# 復興のその先を見据えて



仙台市消防局長 中塚 正志

未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発生からこの3月で7年が経過いたします。この間、本市は国をはじめ全国の皆様から心温まる多くの御支援を頂戴し、市民とともに復旧・復興の歩みを進めてまいりました。被災者の生活再建や心のケアなど、いまだ復興への道りは続きますが、お陰様を持ちまして復興公営住宅や津波避難施設など計画された施設の多くが整備を完了するとともに、消防関連でも津波により被災した消防航空隊の新庁舎が4月から運用を開始することとなります。

その一方で、本市は震災経験都市として、震災の記憶・教訓の継承にも努めており、発災直後に多くの児童や教職員、地域住民が避難した仙台市立荒浜小学校を震災遺構として、被災したありのままの姿と被災直後の写真展示等を通じて、来館者に防災・減災の意識を高めていただくための取組を進めています。

また、仙台防災枠組が採択された第3回国連防災世界会議以降も本市では様々な国際会議を誘致しており、昨年11月には、スイスで隔年開催される防災ダボス会議と連携した「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017」が開催され、国内外から産・官・学・民の防災関係者が集まり、様々な講演、展示、ワークショップ等が行われました。このフォーラムは今後も本市において隔年で継続開催されることが決定し、世界の防災先進地＝東北・仙台として、震災で得た知見をはじめ防災・減災に関する様々な情報を国内外へ発信していくこととしております。

このように復旧・復興や防災に関する取組を進める中、本市でも全国と同様に高齢化が進展し、今後数十年にわたり救急需要の増大が見込まれるなど新たな課題が顕在化してきております。宮城県では昨年10月に救急電話相談事業（＃7119）がスタートし、救急車の適正利用に向けた環境整備が図られましたが、これに加えて本市では、救急需要の特に高い市中心部の対策としてJ R仙台駅北側の高架橋下に救急専用出張所を整備し、2隊の救急隊を配置することとしました。この出張所は2年後の運用開始を目指し



仙台消防階子乗り  
(平成30年仙台市消防出初式)

ており、現在、その機能や運用等について検討を進めているところですが、今後も復興のその先をしっかりと見据え、求められるニーズに的確に対応していく必要があると考えております。

さて、最後に大変喜ばしいニュースを御紹介させていただきます。本市では市内7つの消防団全てに階子（はしご）乗り隊が結成され、消防団員が階子乗りの伝統継承に努めております。この「仙台消防階子乗り」が、昨年11月にその独自性や文化的価値が認められ、仙台市の無形民俗文化財に指定されました。消防本部と消防団は地域防災の両輪であり、先の震災におきましても連携の重要性が再確認されましたが、仙台藩祖・伊達政宗公以来、多くの先達が培ってきた仙台の文化継承という側面におきましても協力しながら、今後も引き続き市民生活の安全・安心の確保に取り組んでまいりたいと考えております。